

## 第 71 回 文化講座

### 京の内跡出土品と過ごした日々

—平成 6 年度の検出遺構を中心に—

金城 亀信（沖縄県立埋蔵文化財センター所長）

【日時】平成 30 年 3 月 31 日（土）13：00～14：00

【会場】沖縄県立埋蔵文化財センター 研修室

# 京の内跡出土品と過ぎした日々

## —平成6年度の検出遺構を中心に—

沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 金城 亀信

### 1. はじめに

首里城跡(第1図)は那覇市首里当蔵に所在し、標高100～135mの琉球石灰岩丘陵上に築かれた琉球国王の居城であった。その規模は東西370m、南北213m、面積46,167㎡と県内最大規模のグスクであった。築城時期は14世紀頃に中山王察度によって築城された伝承もあるが定かではない。1406年に尚巴志が中山(首里城)を攻略し、察度の子である武寧を滅ぼし、琉球王国の支配の拠点となり、尚巴志以来最後の琉球国王となった尚泰が明治政府に首里城を明け渡した1879(明治12)年の琉球処分までの約500年間に亘って政治・文化・経済の中核として機能したグスクであった。

戦前の首里城は、1925(昭和14)年に正殿・瑞泉門・白銀門・歓会門などを含む建造物が国宝として指定を受けるが、1945(昭和20)年の沖縄戦で消失した。戦後は1950(昭和25)年に琉球大学が創設され、1982(昭和57)年までの32年間沖縄の最高学府として機能した。

1972(昭和47)年に本土復帰の際、沖縄県が首里城及びその周辺文化財を戦災文化財として復元整備計画を立案し、復帰直後から「首里城城郭等復元整備事業」が沖縄開発庁(現:内閣府)の補助で首里城歓会門復元整備から始まり2001(平成13)年までの29年間に要して、木曳門・継世門を含めた外郭の城壁1,080mが復元された。

首里城内郭の復元整備については、1984(昭和59)年に沖縄県が「首里城公園基本計画」を策定し、その中で正殿などを含む建造物群の復元が検討された。1986(昭和61)年に首里城公園計画区域である約18haの内、城内内郭の約4haを沖縄県の本土復帰を記念する国の「都市公園整備事業(国営沖縄記念公園首里城地区)」として復元整備を実施することが閣議決定された。1992(平成4)年に遺構確認調査の成果などを踏まえて正殿を含む建造物群が復元され、内郭の一部が一般公開されている。

なお、2000(平成12)年12月2日には『琉球王国のグスク及び関連遺産群』として首里城跡・圓比屋武御嶽石門を含む9の資産がユネスコの「世界遺産」として登録された。

このような中で、首里城内で最も重要な聖域であった「京の内」地区の復元整備が検討され、復元整備に必要な基礎資料となる遺構確認の発掘調査が、1994(平成6)年度～1997(平成9)年度までの4ヶ年間に亘って調査を実施(第1図)した。

## 2. 首里城関連と京の内地域の主な歴史と考古学研究小史

首里城及び京の内に関する主な事項を下記に記述した。

- ① 1372年：中国明王朝の洪武帝の招諭を受け中山王察度が泰期を遣わし初めて進貢する（註1）
- ② 1392年：察度が数十丈の高楼“高ヨソウリ（高世層理殿）”を造り遊観する（註2）
- ③ 1406年：尚巴志が中山を攻略し、察度の子武寧を滅ぼす（註2）
- ④ 1416年：北山の攀安知を滅ぼす（註2）
- ⑤ 1427年：尚巴志が首里城周辺の安国山に池（“龍潭”）を掘り、華木を植える（註3）
- ⑥ 1429年：南山の他魯毎を滅ぼす（註2）
- ⑦ 1453年：王位継承争いで“志魯・布里の乱”が起きる（註2）
- ⑧ 1459年：『明實録』英宗實録、卷301（1459年4月5日）「天順三年三月癸未朔〔甲申〕禮部奏、琉球國中山王尚泰久奏稱本國王府失火、延燒倉庫銅錢貨物。（以下省略）」（禮部の奏では琉球國王尚泰久の奏稱により、本國の王府が火災に遭い倉庫の銅錢、貨物なども全部焼けた。・・・）（註3）
- ⑨ 1576年：天界寺（守礼門と玉陵の中間に所在した）失火し、高楼（高よそウリ殿）が炎上、向氏、湧川家五世の朝首ひとりが登って消し止める（註4-b）
- ⑩ 1936年：伊藤忠太・鎌倉芳太郎の両氏による城内4箇所〔A：西ノアザナ東南側下文字瓦層、B：京ノ内西北側下（西）、C：京ノ内北側下（東）、D：正殿前〕の発掘調査で、B：京ノ内西北側下（西）の調査で「此の地点は、出土品より見て、弘治5年（西紀1492年）以降、それより程遠からぬ時代に埋藏され、出土品は略ぼ成化、弘治の頃のものが多くと想定される。」と報告（註5）
- ⑪ 1962年：大川清氏による西ノアザナ発見の古瓦の調査と高麗系古瓦などの研究・分析（註6）
- ⑫ 1965年：多和田真淳氏による「首里城の古銭と首里遷都」（註7）で、考古学的見地と編年研究から「察度王の築いたと思われる古城（後代の京の内）が破壊された時も（中略）首里へ移った察度が（中略）他の貿易権の共存を認めた。（中略）首里城、勝連城、崎山子屋敷跡から第三様式の高麗瓦が出土するのは、その証左だと考える（中略）したがって察度王が首里城に移ったところ（1350年—1360年）にはまったく須恵器の影をひそめてよいわけである」と記している。
- ⑬ 1971年：多和田真淳氏は「古都首里と古図」（註7）で、「察度は新首里城の京之内に当たる部分（首里城団塊の南の端）に旧首里城を建設した。（中略）第一尚氏になってから旧首里城は廃止されもっぱら神事用の京之内として利用され、新首里城へと大拡張されたのである。」とし、また、多和田氏は「浦添から首里に主都が移ったのは察度王即位のところで、彼は

後世の首里城内にあった京之内といわれた所に城を築き、有名な「たかよそうり」という高樓を建てたのである。彼は『癸酉年高麗瓦匠造』と大天の銘のある高麗瓦を浦添城から運び、(中略)京之内の古城が拡大され、名実ともに城らしくなったのは尚巴志の時代であろう」と記している。

- ⑭ 1986年：亀井明德氏は、「明代華南彩釉陶器をめぐる諸問題」(註8)で、伊藤・鎌倉の両氏が報告した明代華南彩釉陶の研究から「沖繩から(中略)とりわけ三彩水注などにこのボルネオの『聖なる器』と共通する文化要素が存在したのであろうか。(中略)とりわけ首里城の大量の出土品に注目したい。(中略)京の内で行われた神事とは、王権の交替に伴う儀事といえる。首里城内で発見された大量の華南彩釉陶器が、東半分の殿舎の付近ではなく、この祭事の場の付近であったのは、まさしく、これから新しい支配者を選挙する世誼の際に使われたことを推測させる。(中略)これらの陶器が琉球において新しい支配者の推挙に伴う祭事に用いられた聖器であるとする見解を提起したい。」と記している。
- ⑮ 1991年：真栄平房敬氏は、『首里城物語』(註4)で、京の内の洞穴について次のように記している「この洞穴には第一尚氏から第二尚氏への政権抗争にまつわる伝承がある。すなわち第一尚氏王統末期の革命の際、尚徳王の世子が避難した場所であると言われている。」と記し、更に真栄平氏は『球陽』「勝城由来」の項から「(前略)尚徳王(中略)王妃・乳母・世子を擁護して以て乱難を避け、皆真玉城に隠る。」を引用し、真玉森御嶽と真玉森グスクの位置について以下のように記している「この洞穴の北側5～6メートルまで離れたところに西に向かって真玉森御嶽が位置していた。(中略)首里城発祥の地である京ノ内の丘は、かつて真玉森とよばれ、そこに築かれた最初の城は真玉城(真玉は接頭美称語)とよばれたであろうと考えられる。」と結論付けている。
- ⑯ 2009年：上原 静氏は、「首里城西のアザナ跡の鍛冶・鑄造工房」(註9)で、鍛冶・鑄造工房の時期を「当該地区の上限を示す出土陶磁器の14世紀後半から15世紀前半は、首里城内の他地区における造成層にみる出土状況とも共通し、高麗・大和系瓦も含み、(中略)他方、下限を表す出土陶磁器の17世紀資料は3片と僅少で、(中略)造成終了以降に混じったものと考えられる。(中略)主たる15～16世紀の陶磁器年代が操業活動期で、灰色を帯びる湧田系瓦と後に流行する赤色瓦を考慮すると、遅くともその停止と関連施設の廃棄が17世紀頃に行われ更地になっていたものと考えられるのである。」と記している。
- ⑰ 2014年：糸数兼治氏は、「グスク試論—スクとシキー」(註10)の中で、京の内

の創設に至るまでの過程をについて以下のように記している「琉球では(中略)天神・海神を陰陽二神として特別に尊崇する。この二神は君真物(キミマモン)の神として御嶽に出現する。(中略)キミテズリは神名ではなくキミマモンを祭る祭式の名であるらしい。(中略)守護の神(キンマモン)には陰陽の二神があり、海神(竜神・太陽神)はのちに弁財天と習合する。(中略)。本来琉球の神概念はマモノ系(ミノノとも、山の神。居処はオボツ・カグラ天城、天神「神オリルという」、(中略)であったと思われるが、英祖の時仏教と習合してテダ系(海の神。居処はニルヤ・カナヤ竜宮、海神「上ノボルという」、中山・山南の神)に転換する(中略)。察度のときマモノ系が復活する。(中略)第一尚氏は天神とともに海神も祭ったらしいが(中略)第二尚氏になると海神を重視して英祖の太陽神信仰に回帰し、第一尚氏の最高神女「サスカサ」にかえて「聞得大君」(中略)を立て陰陽を兼ねしめ、「京の内」が造成されたのではあるまいか。」とした。

また、系数氏は〔「京の内」について安仁屋真昭氏の次の説を引用・支持している〔「けおのうち」(京の内)は「ぎーうーのうち」で濁音の非口蓋音〕であるという。「げお」は「ぎう」で「ぐう宮」の音を写したものであることであろう。「げお(グウ宮)のうち」は竜宮(海神の居処)を意味すると思われるが、〔対語は「もちろん(清浄)」うち(天神の居処)〕、天上の「天城アマグスク」に対するものでであろう。〕と解釈をし「京の内」を「宮の内(げおのうち、ぐうのうち)」=「竜宮(海神の居処)」として位置付けているようである。

更に系数氏は京の内の神名の解釈について次のように記している。「一方「真玉森」(洞穴がある)は所在に言及がないから「キョウノ内」ということであろう。「京の内」には他に三御嶽がある。「添継御門(継世門)の南のひもん」(1546年、尚清20)には城壁工事の外、雲子嶽・ヨツギ嶽・煽りや嶽が造営(又は重修)されたという。これは「京の内」三御嶽に相当しよう。(1)「神名 シキヤチシキヤダケノ御イベ」(2)「神名 ソノイタジキノ御イベ」(3)「神名 アガルイノ大御 イベ」(『由来記』)である。(中略)(1)は地下世界を思わせるし、(2)は板敷(現遺構は磚瓦レンガ敷、ソノは未詳)であろうか、(3)は海神(太陽神)であろう。なお、「京ノ内」の「サンコウリ(三庫理)」は「サイハ御嶽」に移設後は断崖に臨むから「京ノハナ(はずれ)」という。これは地底に通じる洞穴の入り口を思わせる。(中略)次の尚清王のとき太陽信仰はいっそう隆盛となり、「京の内」(海神の祭場)も造成または整備されたのではなかろうか。」と記している。

### 3. 首里城「京の内」とは

#### 1) 「京の内」の語義

「京の内」は、首里城内郭の南西側にある最も神聖なる祭祀や儀式をおこなう空間である。京の内の語義として「けお(きょう:京)」は、「セジ(霊力)」の同義語として考えられ、“神または神の霊力”の意味を持っている(註11)。最近になって、おもろ研究会の安仁屋真昭氏の研究を支持した系数兼治氏は、「けおのうち」(京の内)は「ぎーうーのうち」で、「げお」は「ぎう」で「ぐう宮」の音を写し、「げお(グウ宮)のうち」は竜宮(海神の居処)を意味するものと解釈がなされている(註10)。また、民俗学では神が降臨する大岩の頂上やシマ前(集落海岸近く)の岩島・小島を「京:きょう」と称している(註12)。その他、南城市知念の斎場御嶽内の三庫理に入る右手側の岩の頂上を“キョウノハナ(ギョウノハナ)”と称し、大岩直下の香炉から岩の上の“キョウノハナ”を拝み、香炉の側にあったクバ(ビロウ:ヤシ科の常緑高木)の神木を足掛かりにしてアマミキヨが天降りされた(註13)などの事例からも「京の内」の「きょう」は、神が降臨、若しくは来訪する場所の意味合いがある。以上ことから京の内の「うち(内)」は、“聖域”・“区域”などの意味合いから推察すると京の内は「神が降臨する聖域(天神・海神の祭場)」、「宮の内:竜宮(海神の居処)」として理解されるところである。

#### 2) 「京の内」の御嶽

京の内に所在した御嶽は、基本的に五つの御嶽(第2図)で構成されていて、京の内の最も高い位置(標高135m:「京ノハナ」)に「首里森御嶽(神名:玉ノミヤ御イベ)」、岩山の洞穴部分に「真珠森御嶽(神名:真玉城の玉のみやの御いべ)」がある。この両御嶽が首里城の別称(聖名)となり、「首里森グスク」或いは「真玉森グスク」と称されているのもこの御嶽の名前に由来する。その他、この二つの御嶽の創設由来では、沖縄の閩神アマミキヨが造った御嶽とされている。また、“京の内之三御嶽(神名 きょうのうちしきやちしきやたけの御いべ、神名 きょうのうちのあかるいの御いべ、神名 きょうの内のそのいたしきの御いべ、)”の三神と称される三つの御嶽(註14)があった。この“京の内之三御嶽”の神名について系数兼治氏は、(1)「神名 シキヤチシキヤダケノ御イベ」を地下世界を思わせる、(2)「神名 ソノイタジキノ御イベ」を板敷(現遺構は磚瓦レンガ敷、ソノは未詳)であろうか、と(3)「神名 アガルイノ大御イベ」を海神(太陽神)であろうと解釈をしている。これらの「京の内」にあった五つの御嶽は、発掘調査で確認された石積み遺構などを基本にして、2001(平成13)年度から御嶽や石積みの復元工事が始まり、2003(平成15)年度に復元を終えて一般に公開されている。

### 3)「京の内」での祭祀・儀式

首里森御嶽の西側城壁（大岩の頂上に城壁を廻らす）で、城壁がアーチ門にすりつけられた部分がある。この部分が新国王に託宣を下すために“キミマモン（君真物：天神・海神の陰陽二神）”が降臨する場所であったと言われている。首里森御嶽で琉球王国最高神女であった“<sup>うごくと おれがみ</sup>聞得大君”を頂点とする高級神女“<sup>さんじゅうさんさん</sup>三十三君”が降臨神の“キミマモン”の神を迎え祭るために“キミテズリ（<sup>てずり</sup>君手摩）”の祭式を執り行い“聞得大君”を中心とした高級神女と共に歴代の琉球国王へ“世おそうせち（世を治める霊力）”が高まるように“オボツ・カグラ（神の居処）”と“ニライ・カナイ（海の彼方、若しくは海の底、地の底にあってそこから神々が来訪し、さまざまな豊穰と幸をもたらす）”の神に祈願し、国王へ託宣を下したようである。

この京の内では、“キミマモン”の神を迎えて歴代琉球国王の即位決定、国王への託宣など琉球王国の重要な祭祀や儀式が執り行われた（註10・11）。

参考までに第一尚氏王統（1406年～1469年）の最高神女は“<sup>うごくと</sup>佐司笠”であったが、第二尚氏王統から地位を“<sup>うごくと</sup>聞得大君”に譲るが佐司笠は依然として高い神格があった。

## 4. 1994（平成6）年度から1996（平成8）年度までの発掘調査概要

京の内地区の発掘調査（調査面積約5,000㎡）は、1994（平成6）年度～1997（平成9）年度までの4カ年間に亘って実施（第1図）した。この中で拙者が担当した1994（平成6）年～1996（平成8）年度までの3カ年間調査をおこなった際に検出された主な遺構などについて概要を以下に記した。

なお、これらの遺構は、今後の資料整理の進捗等で遺構の年代観において修正や見直しが必要であることを前提に報告する。

1994（平成6）年度～1996（平成8）年度までの京の内地区の調査で、14世紀中頃～15世紀中頃迄の遺構として、野面積みの石積み、基壇、倉庫、瓦葺きの建物、御嶽などの遺構が存在したようである。

1994（平成6）年度の遺構については、出土遺物や遺構の切り合い（重複）関係から第Ⅰ期～第Ⅵ期までの6期（第3図）に大別し、以下に記した。

#### ①第Ⅰ期（14世紀前半～14世紀後半頃）の遺構（第4図）

野面石積み1基。琉球石灰岩の表面を掘り込んだビット様の穴9基。

#### ②第Ⅱ期（14世紀終末頃～15世紀前半）の遺構（第5図）

基壇付建物1基。区画石積み1基。土壇1基。

#### ③第Ⅲ期（15世紀中頃）の遺構（第6図）

区画石積み5基（内1基は御嶽）。倉庫跡（南側に階段が取り付く）1基。

#### ④第Ⅳ期（15世紀後半～16世紀初頭）の遺構（第7図）

区画石積み7基。石敷き遺構2基。

⑤第V期（16世紀前半～19世紀後半）の遺構（第8図）

区画石積み5基。塼瓦敷遺構1基。

⑥第VI期（19世紀終末～昭和58年）の遺構（第9・10図）

首里第一尋常高等小学校校舎跡と便所跡2基。同小学校関連の建物跡1基。琉球大学時代の遺構（法文学部校舎の切石積みの擁壁、基礎の栗石）2基。建物基礎（フーチング）26基。排水溝5基。植栽穴3基）36基。

以上、これらの遺構で、第I期～第IV期までの時期で、主な遺構を挙げると、

①第I期：ピット様の穴からウシ、ブタ、ニワトリ、ウサギの骨が出土し、ピット周辺から青磁の香炉が出土していることから祭祀と関連する遺構として考えられる。

②第II期：基壇付建物は、規模が南北757m（4間1尺）・東西13m50cm以上（7間1尺以上）、基壇の残存高1m、基壇石積みには積み方の方向や石積みの組み方などを示すへら記号（△、J、くなどが鉄製金具で掘り込む）が19箇所確認。

③第III期：倉庫跡は（第12図E）、1459年の失火による火災で輸入陶磁器（中国、タイ、ベトナム、本土産）が1,162個体と金属製品やガラス製品（ビーズ、勾玉）などが出土した。この中から陶磁器518点（附金属製品・ガラス製品一括）が2000（平成12）年6月27日付で国の重要文化財（考古資料の部）として沖縄県で初めて指定された。その他に調査区の南西隅で御嶽の石積みが1基検出されている。

④第IV期：石敷き遺構2基（第11図）は、2基が切り合って検出。北側の石敷き遺構は南北330cm（2間弱）、東西980cm（5間弱）の内側に細粒砂岩製の石敷きと礎石（礎石間短軸95cm、礎石間長軸163cm）12個が設置と推定した。計測した間数は、本土の尺貫法では一致しないが、中国明代（14世紀～17世紀の1尺=31.1cm）の尺貫法を充てると誤差は0.1～2cm程度の範囲内にあることから当該遺構は中国明代の度量衡に基づく尺度で設計・建築された事が判明した。当該遺構の用途は判然としないが、例えば礎石の上に盆栽を配置した遺構、或いは儀式や祭祀の際の石火矢の固定式発射台の柱の礎石や飾り旗の掲揚台の柱の基礎などが考えられた。

1995（平成7）年度の遺構で注目されたのは、瓦葺きの建物礎石（第12図A～C）である。この建物遺構（SB02）は、京の内でも最も高い地域から検出されている状況からすると察度王（在位期間：1350年～1395年迄の45年間）が、1392年に数十丈の高楼を造り遊覧した高世層理殿の礎石か、或いは1576年の家譜資料にみえる天界寺（守礼門と玉陵の中間にあった）失火し、高楼（高よそうり殿）の一部が炎上した際の建物礎石か、いずれかの高楼の礎石として考えられる。

礎石周辺から出土した陶磁器などの遺物からすると14世紀中頃から15世紀中頃

迄の時期に収まっているが、礎石より上位に存在したであろう15世紀中頃以降の遺構や遺物包含層は、琉球大学の校舎等の建設や造成の工事に伴う岩盤の削平などで損失した。

この瓦葺きの建物遺構（SB02）が構築される以前は、礎石の西側で、小物用の青銅製品を製作する為の小型の鍛冶炉跡（15世紀中頃）が、13基切り合いながら検出（第12図C）されている。

1995（平成7）年・96（平成8）年度に検出された遺構で注目されたのは、洞穴遺構（SX01）がある（第12図A・D）。洞穴遺構の入口は、自然の開口部をある程度加工し、入口部分に切石を積み上げている。入口外側の根石直下には板状に加工した細粒砂岩（俗称：ニービヌフニ）の両端近くにホゾ穴（扉の支柱受け）を設けて横位に設置・固定した遺構が検出されている。また、洞穴内部の床面には、灰色の埴瓦を敷いて漆喰で固定していたようである。

更に洞穴内の北側の大きな窪みを野面石積みで塞いで新たに壁を造り、壁の外側を意図的に凹凸のある加工を施している。この加工面の窪に漆喰が残っていたことなどから判断すると洞穴の壁は、全体的に漆喰による白壁であったものと推定された。

なお、洞穴内の最下層（第12図D）から15世紀中頃のベトナム青花などが出土していることと埴瓦の直上から17・18世紀の沖縄産陶器片などが出土している状況からすると洞穴内の整備は、今のところ16・17世紀頃が想定される。

この洞穴については、真栄平房敬氏は『首里城物語』（註4）で、「この洞穴には、第一尚氏から第二尚氏への政権抗争にまつわる伝承がある。すなわち第一尚氏王統末期の革命の際、尚徳王の子が避難した場所であると言われている。」と記し、そして真栄平氏は『球陽』の「（しんたくす）勝城由来」の項を引用しながら次のように記している「（前略）尚徳王（中略）王妃・乳母・世子を擁着して以て乱難を避け、皆真玉城に隠る。」を引用し、真玉森御嶽と真玉森グスクの位置について以下のように記している「この洞穴の北側5～6メートルまで離れたところに西に向かって真玉森御嶽が位置していた。（中略）首里城発祥の地である京ノ内の丘は、かつて真玉森とよばれ、そこに築かれた最初の城は真玉城（真玉は接頭美称語）とよばれたであろうと考えられる。」と結論付けている。

1996（平成8）年度の調査では、“京の内之三御嶽”と称された御嶽石積みの根石及び石積みの一部が、三箇所で見出されている。御嶽の一つは、石積みの目地から「永樂通宝（明：初鑄造1408年）」が2・3枚。他の御嶽石積みからはヤギの下顎骨や石灰岩製の円筒型三足香炉が出土している。

なお、円筒型三足香炉が出土した御嶽跡の成立した時期を確認するために御嶽跡

の南側基礎部分に試掘坑を設定し調査を実施した結果、御嶽の基礎石の直下から深さ10～15cm レベルから中国銭貨の「嘉祐元寶（北宋：1056年初鑄造）」1枚、「元祐通寶（北宋：1086年・1093年初鑄造）」2枚、「洪武通寶（明：1368年初鑄造）」1枚、「永樂通寶（明：1408年初鑄造）」2枚の計6枚と琉球王国の銭貨「世高通寶（1461年初鑄造）」1枚の合計7枚の他に大小のチョウセンサザエの殻を利用した埋納容器が発見された。

発見直後にサザエの殻蓋を開けてサザエの殻の中を確認するために竹串で中を確認し、殻中には何も存在しないと判断し、その時は「先祖様（うやふあーふじ）は遊び心でサザエの殻同士を合わせて埋めたのかなー。」と思いつつも気になってサザエの殻蓋を元の通り殻同士を合わせ戻して、御嶽跡から出土した銭貨と一緒に貴重遺物として一括で保管し、遺物の洗浄までを現場事務所で行った。発掘調査から18年後の2014（平成26）年に注記作業の最中にサザエを手にした職員から「班長！誰かがいたずらして貝殻に金紙を入れていますよ。」との笑い声を聞いて、「昔の人がいたずらをするようなことはない。」と話してから振り返ってみると本物の金銭（金製厭勝銭）でした。金銭（以下、「金製厭勝銭」と記す。）は最終的に8枚がサザエの殻の中から発見された。

金製厭勝銭の製作方法と特徴として、初めに金を薄く延ばした板にコンパスのようなもので円を描いてから金物の工具（鋏）で切り抜いて円盤を完成させ、その後円盤の中央に釘で穴を穿ったものが3枚（平均法量：直径18.3mm、厚さ0.09mm、重量0.36g）と正形状に穴を切り開いたものが5枚（平均法量：直径20.41mm、厚さ0.10mm、重量0.35g）、合計8枚が確認された。

この御嶽の設立した時期は、「世高通寶（1461年初鑄造）」が、第一尚氏王統最後の国王となった尚徳王（神号：セダカオウ）が即位した1461年に鑄造（字款の「世高」は、王の神号）された琉球銭であることから第二尚氏王統（尚円王即位）が成立した1470年以前の時期に御嶽が創建されたものと推察され、金製厭勝銭としては最古の資料で、しかも埋納時期が（1461年以降～1470年以前）と限定されるようである。

ところで御嶽の創建する際に土地の神様に地鎮や吉祥物と供えるために貨銭や金製の銭形の厭勝銭を埋納するようである。厭勝銭の儀礼は中国や日本本土から伝わったもので、県内での金製厭勝銭の出土事例からすると首里王府の重要な儀式や祭祀を執り行う上で最も関わりの深い御嶽から発見されていることが注目される。金製厭勝銭が出土した御嶽を挙げると、斎場御嶽（金製厭勝銭13枚、銀製厭勝銭2枚）、園比屋武御嶽（金製厭勝銭6枚）、赤田御門之御嶽（金製厭勝銭12枚）、京の内の御嶽（金製厭勝銭8枚）の4つの御嶽（遺跡）から出土している。現時点での厭勝銭の出土枚数は、金製厭勝銭39枚、銀製厭勝銭2枚が確認されている。

## 5. おわりに

京の内は、多和田真淳氏が指摘するように察度が浦添から首里に遷都し、最初にグスクを築城した“古城”があった可能性は高い。京の内の遺構確認のための発掘調査の成果から第1期（14世紀前半～14世紀後半頃）の遺構で、野面石積みや土壇（SK03）やピット群などがこの時期を示す遺構である。

また、1995（平成7）年度に調査をおこなった京の内の南側高所で発掘された礎石建物周辺から屋瓦が建物の配置を示すような形（平面観が「L」字状となった雨落ち溝に屋根瓦が堆積）で出土していた。この礎石のある瓦葺きの建物が察度が1392年に構築した数十丈の高世層理殿の礎石か、或いは1576年の家譜資料にみえる天界寺の失火により炎上した高樓（高よそうり殿）の礎石かどうかについては、今後の遺構の検討や出土遺物の整理をとおして判断されるものである。

最後に京の内地区の1994（平成6）年度から1997（平成9）年度迄の4ヶ年間に亘って実施された発掘調査で出土した出土遺物の量は、コンテナ1,048箱を数え、現在も整理中である。1994（平成6）年度の出土遺物を遺構毎に整理して、2011（平成23）年度に平成6年度調査の遺構編を刊行した。

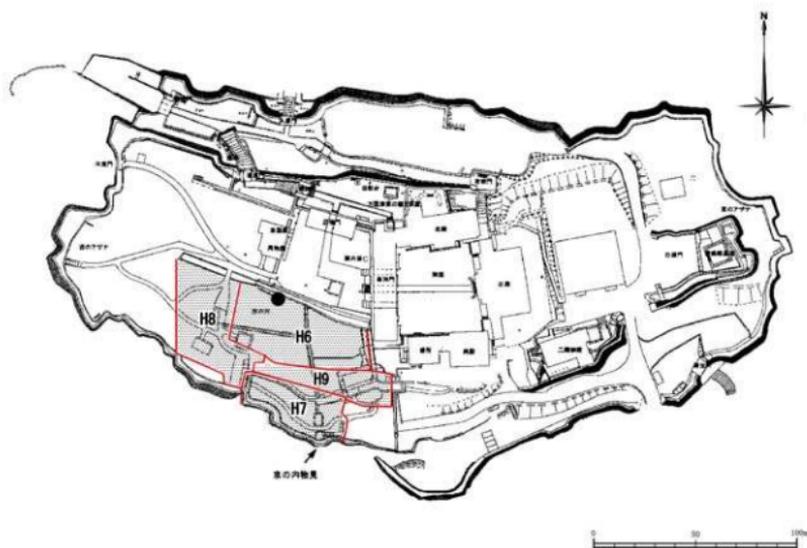
1994（平成6）年度から1996（平成8）年度までの報告が完了すれば遺構や遺物をとおして、京の内での祭祀や儀式などの利用の在り方や性格などが浮かび上がってくるのではないかと思慮される所である。

#### 【註文献】

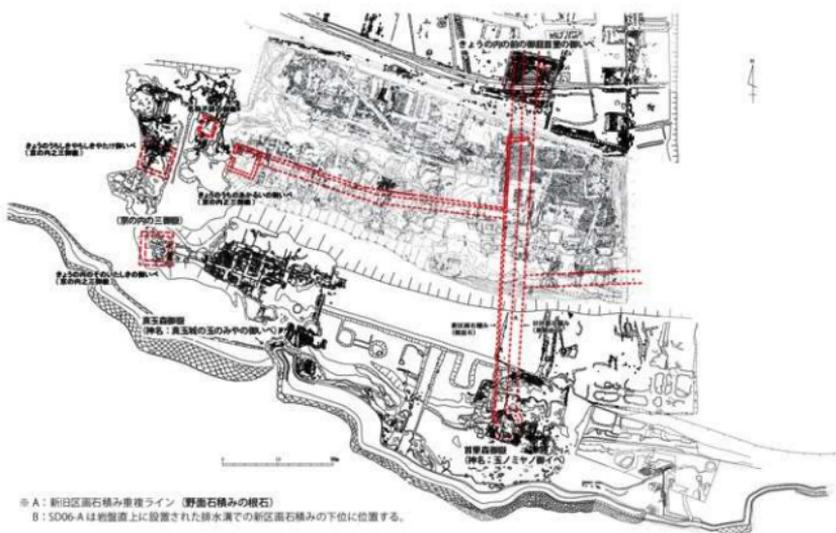
- 註 1. 日本史料集成編纂会『中国・朝鮮の史籍における日本史料 明實録之部 1』国書刊行会 1979 年。
- 註 2. 沖縄県教育委員会『重新校正 中山世鑑』1983 年。
- 註 3. 沖縄県教育委員会『金石文—歴史資料調査報告書 V—』1985 年。
- 註 4-a. 真栄平房敬『首里城物語』ひるぎ社 1987 年。
- b. 比嘉朝進『沖縄のサムレー（家譜にみる士族）』風土社 1990 年。P24「9 五世から越來総地頭職 向氏一世 越來王子朝理（尚宣威王長男）五世・・朝首（中略）1567 年に天界寺（守礼門と玉陵の中間にあった）が失火し、火の手は城内の高樓に燃え移った。しかし、高所なのでだれも消し登るものはなく、朝首ひとりが登って消し止めた。」
- 註 5. 鎌倉芳太郎『セレベス 沖縄発掘古陶器』国書刊行会 1975 年。
- 註 6. 大川清「琉球古瓦調査抄報」『沖縄文化財調査報告 1962 年版』沖縄県教育委員会監修 那覇出版 社 1978 年。
- 註 7. 古希記念多和田真淳撰集刊行会編『古希記念多和田真淳撰集（考古・民俗・歴史・工芸編）』1980 年。
- 註 8. 亀井明德「明代華南彩釉陶をめぐる諸問題」『日本貿易陶磁史』同朋舎出版 1986 年。
- 註 9. 上原静「首里城西のアザナ跡の鍛冶・鑄造工房」『紀要 沖縄埋文研究 6』沖縄県立埋蔵文化財センター 2009 年。
- 註 10. 糸数兼治「グスク試論—スクとシキ—」『南島文化』第 36 号 沖縄国際大学南島文化研究所 2014 年。
- 註 11-a. 外間守善・西郷信綱『おもしろさうし』日本思想体系 18 岩波書店 1972 年。
- b. 外間守善校注『おもしろさうし』（上・下）（全 2 冊）岩波書店 2006 年。
- c. 首里城研究グループ『首里城入門—その建築と歴史—』ひるぎ社 1989 年。
- 註 12. 仲松弥秀『古層の村』沖縄民俗文化論 タイムス選書 4 沖縄タイムス社 1977 年。
- 註 13. 仲松弥秀「新垣孫一翁よりの聞き書き」『知念城跡・斎場御嶽及び周辺整備基本構想・基本計画』知念村 1993 年。
- 註 14-a. 伊波普猷ほか『琉球国由来記』名取書店 1940 年。
- b. 首里城研究グループ『首里城入門—その建築と歴史—』ひるぎ社 1989 年。
- 註 15. 首里城研究グループ『首里城入門—その建築と歴史—』ひるぎ社 1989 年。

#### 【参考文献】

- ◎ 眞貫嗣一「火矢について」『南島考古』第 14 号（学会創立 25 周年記念特集号）沖縄考古学会 1994 年。
- ◎ 沖縄県教育委員会『首里城跡—京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）—』1998 年。
- ◎ 文化庁・沖縄県教育委員会監修『世界遺産 琉球王国のグスク及び関連遺産群』世界遺産登録記念事業 実行委員会 2001 年。
- ◎ 沖縄県立埋蔵文化財センター 特別企画展『首里城京の内展—貿易陶磁からみた大交易時代—』2001 年。
- ◎ 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡—京の内跡発掘調査報告書（Ⅱ）—』2009 年。
- ◎ 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡—京の内跡発掘調査報告書（Ⅲ）—平成 6 年度調査の遺構編』2011 年。



第1図 首里城跡京の内地区 年度別発掘調査箇所 (●1459年失火消失倉庫跡)



※ A：新田区画石積み重複ライン（野島石積みの根石）  
 B：SD06-Aは割盤置上に設置された排水溝での新区画石積みの下位に位置する。

第2図 京の内地区で検出された御殿及び区画石積みから推定した京の内空間復元案

(御殿の名称は、社団法人日本公園緑地協会作成の平成11年度 首里城京の内地区調査検討委員会 第1回平成11年12月10日を参考に修正・加筆)



第3図 京の内地区 1994（平成6）年度 発掘調査区遺構全体図



第4図 京の内地区第1期（14世紀前半～14世紀後半頃）遺構の推定復元



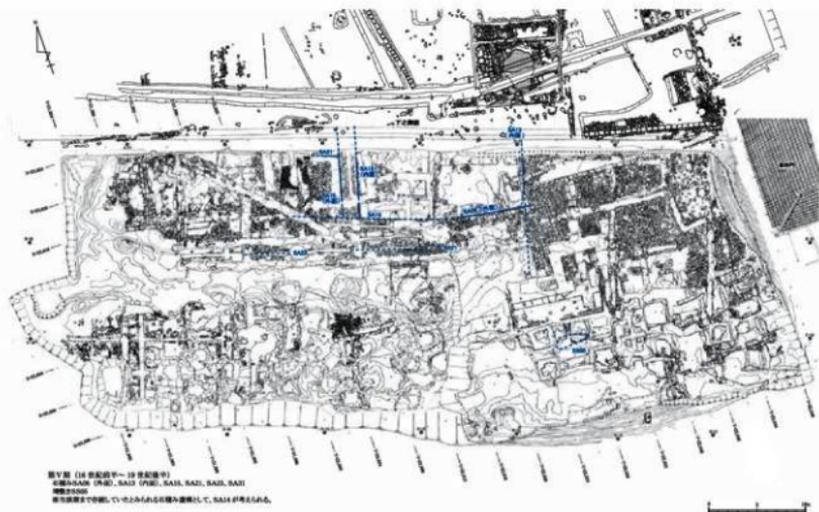
第5図 京の内北地区第Ⅱ期(14世紀末～15世紀前半)遺構の推定復元



第6図 京の内北地区第Ⅲ期(15世紀中頃)遺構の推定復元

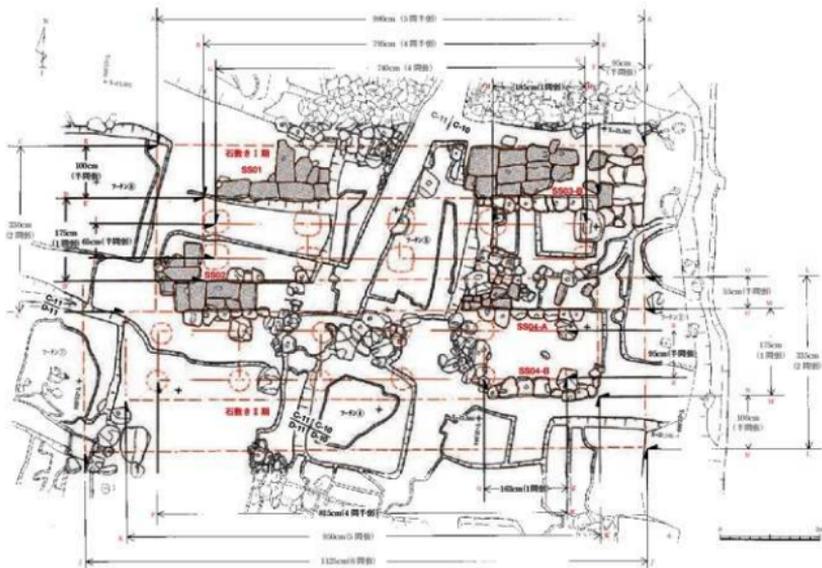


第7図 京の内北地区第IV期(15世紀後半～16世紀初頭)遺構の推定復元



第8図 京の内北地区第V期(16世紀前半～19世紀後半)遺構の推定復元





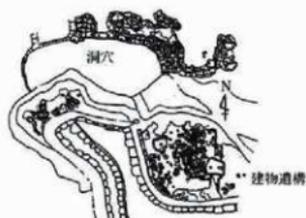
第 11 図 第Ⅳ期 (15 世紀後半～16 世紀初頭) の石敷きⅠ期 (SS01・02、SS03-B、SS04-A)・Ⅱ期 (SS02・SS04-A・B)

第 28 表 C・D-10-11 石敷きⅠ期 (SS01-02、SS03-B・SS04-A)・Ⅱ期 (SS02・SS04-A・B) の規模比較

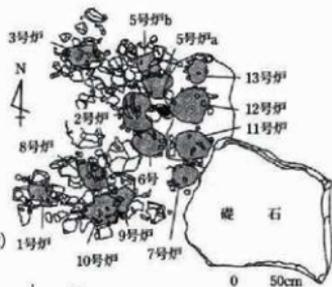
Ⅰ期 (SS01-02、SS03-B・SS04-A)					
計測箇所	①サイズ (cm)	間数	②年代(14～17世紀) 1尺=31.1cm	③②の差 (cm)	
別荘外周	長軸 (A-A')	980	5間半	31.5尺=979.6cm	0.4
	内側 (B-B')	795	4間半	25.5尺=793.6cm	2
	短軸 (C-C')	330	2間	10.6尺=329.6cm	0.4
	内側 (D-D')	175	1間	5.6尺=174.1cm	0.9
石敷き	長軸 (E-E')	190	半間強	3.2尺=99.5cm	0.5
	短軸 (F-F')	95	半間強	3尺=93.3cm	1.7
	長軸 (G-G')	795	4間半	25.5尺=793.6cm	2
別荘内周	短軸 (D-D')	175	1間	5.6尺=174.1cm	0.9
	長軸 (G-G')	740	4間強	23.8尺=740.1cm	0.1
	礎石間 (I-I')	185	1間強	6尺=186.6cm	1.6
	短軸 (J-J')	65	半間強	2.1尺=65.3cm	0.3
Ⅱ期 (SS02・SS04-A・B)					
計測箇所	①サイズ (cm)	間数	②年代(14～17世紀) 1尺=31.1cm	③②の差 (cm)	
別荘外周	長軸 (J-J')	1125	6間強	36.2尺=1128.6cm	0.8
	内側 (K-K')	950	5間強	30.5尺=948.5cm	1.5
	外側 (L-L')	335	2間	10.8尺=335.6cm	0.8
	短軸 (M-M')	175	1間	5.6尺=174.1cm	0.9
石敷き	長軸 (N-N')	190	半間強	3.2尺=99.5cm	0.5
	短軸 (O-O')	95	半間強	3尺=93.3cm	0.9
	長軸 (P-P')	950	5間強	30.5尺=948.5cm	1.5
別荘内周	短軸 (M-M')	175	1間	5.6尺=174.1cm	0.9
	長軸 (P-P')	815	4間半	26.2尺=814.2cm	0.8
	礎石間 (Q-Q')	183	1間強	5.8尺=181.7cm	1.3
	短軸 (R-R')	95	半間強	3尺=93.3cm	1.7

参考：石敷きⅠ期・別荘(Ⅰ期)・別荘の柱間寸法6尺等間、築間(Ⅰ期)・別荘の柱間寸法2.1尺等間、石敷きⅡ期・別荘(Ⅱ期)・別荘の柱間寸法5.2尺等間、築間(Ⅱ期)・別荘の柱間寸法3尺等間。

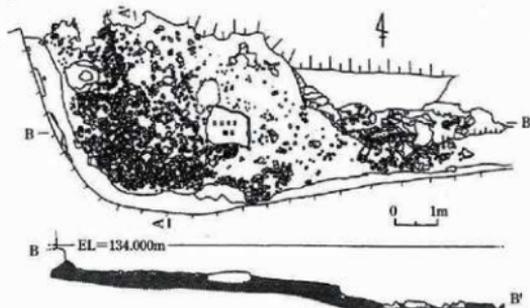
参考文献：鎌田正一・宮内太郎 1990「度会藩時代 史書集成」(尺)・附(6～7世紀)29.5cm、附(7～10世紀)31.10cm、附(8)・(10)・(11世紀)30.72cm、附(11～17世紀)31.10cm、附(17～20世紀)32.00cm、現代中国(10世紀)33.33cm、日本(20世紀)30.3cm。『大分県 築山新築』株式会社 大分県建設 2001年4月1日発行。



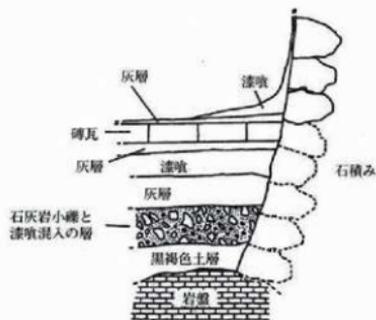
第12図A 1995年度 G-15の遺構平面 洞穴(SX01)建物遺構(SB02)



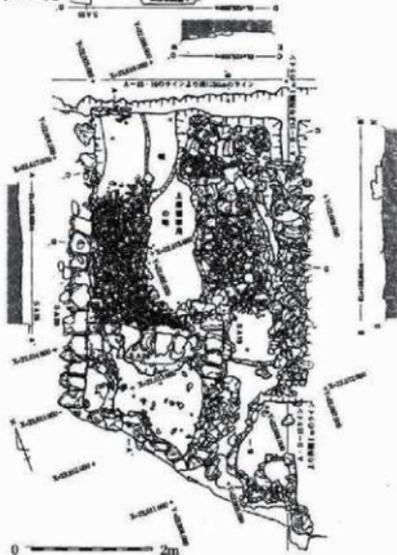
第12図C 1995年度 G-15  
第3層面検出の青銅専用小鍛冶炉群



第12図B 1995年度 G-15の第2層面検出の建物遺構 (SB02)



第12図C 1995年度 洞穴 (SX01)の土層模式図



第12図E 1994年度 1459年失火の倉庫跡 (SK01)  
検出直後の状況

## 今後の催し

### ■ 沖縄県の戦争遺跡

6月5日(火)～6月24日(日)

### ■ 発掘調査速報展 2018

7月31日(火)～9月2日(日)

※ 8/4 (土)、8/12 (日) に関連文化講座あり

平成29年度に実施した  
発掘調査の最新成果を  
いち早く公開します！



## 沖縄県立埋蔵文化財センター

〒 903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7 TEL : 098-835-8751

開所時間：午前9時～午後5時（入所は午後4時30分まで）

休所日：月曜日、国民の祝日（こどもの日、文化の日は開所）、慰霊の日、年末年始、

※月曜が祝日の際は、翌火曜も休所